

## 靖国神社問題を考える

今年も例年通り終戦の日の政治家の靖国神社参拝に関して中国や韓国からの批判が喧しいが、今回は靖国神社の問題に関して考えてみたい。

幕末から明治維新の混乱で多くの人が死に、最後の内戦となった西南戦争でも多くの死者が出た。

前回、日本にはキリスト教やイスラム教の様な系統だった神学を研究し、洗練化する部門が無かったため、実際は誰もが信仰しているにも関わらず、意識していない『縁起でも無い教』が日本人の生活に根付いていると話をしたが、非常にプリミティブな『縁起でも無い教』よりは、もっと具現化した宗教観として『怨霊信仰』が信じられている。

この『怨霊信仰』では、人は死ぬと魂は肉体を離れ霊となると考えられている。

そして、この霊は正しく祭ってあげれば人々に幸福をもたらすが、鎮魂してあげないと人々に害をなすと考えられている。

代表的な例を挙げれば、全国に所在する天満宮である。

政争に敗れ不遇に没した道真の死後、京の都では落雷や火災などの災害や疫病が多発したため、道真の怨霊によるものと恐れられ、天満宮を造営して菅原道真の霊を祭ったのである。天満宮の霊験はあらたかで、それ以降の天変地異はピタリと止み、現在では学問の神様として受験生の最後の心の拠り所となっている。

従って、日本人の宗教観では、維新の戦いにおいて死んだ人々の霊を鎮魂しないと祟りがありそうで精神的に落ち着かない。

そのため東京招魂社と云う施設を造り（明治2年（1869年）、戊辰戦争以来の国に殉じて無くなった英霊の御霊を祭ることになった。

維新の英雄西郷隆盛は逆賊として死んだため祭られていない（その霊は別の形で祭られている、・・・いや、封じられていると言うべきか・・・）。

この東京招魂社がやがて神社の形を纏って靖国神社（明治12年（1879年））となった。

そして、その後の日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、・・・と、国家に忠誠を尽くして戦没した英霊の御霊を慰めている。

靖国神社は国が造った神社で在り、他の神社とは違うユニークな特徴を持っている。

他の神社のように運営に参画する氏子は存在せず、軍部が運営する神社であった。

戦後、軍部の解体と政教分離により国家の管理を離れ独立した宗教法人となったが、やはり他の神社とは同じに出来ない。

米国でも国立のアーリントン墓地が造られており、南北戦争以降（一部独立戦争）の戦没者を慰霊の施設となっており、戦前の国立の靖国神社だけが特異な例では無い。

以前に宗教の目的とは人々の救済にある（その多くは精神的救済であるが、）と述べたが、

靖国神社の存在理由は、戦争の殉難者の霊魂の鎮魂であって、日本人の宗教観に基づくものであり、他の宗教信者が自己の宗教観に基づいて非難するものではない。

自分の信仰する宗教だけが正しく、他は間違えているとする考えは傲慢であり、過去に宗教の違いによる殺し合いや戦争が繰り返されて来たが、このような悲惨な歴史を謙虚に顧みなければならない。